



『洪水と水害をとらえなおす』  
—自然観の転換と川との共生—  
農文協 二七〇〇円＋税

大熊孝 著

川辺川ダム

二〇二〇年七月五日、球磨川豪雨水害のときの取材会見。「知事が中止を決定した」川辺川ダムがあれば防げたのではないか」という記者の意地の悪い質問に、知事は「計画した対策が実現しなかったのは非常に悔やまれる」と苦渋の表情を見せた。しかし、「ダムによらない治水対策を極限まで追求する」と考えの変わらないうことも強調した。

洪水と水害をとらえなおす



グラビア	地域を支える人 牧田彰一郎さん・静岡県	1
発掘！地域の希望のタネ	和歌山県海南市 〈棕櫚たわし〉	5
給食のじかん	〈えいよう丼〉 岐阜県大垣市	高橋憲治郎 6
書評	大熊孝 著『洪水と水害をとらえなおす』	菅原敏夫 8
焦点	ネットは社会を分断しない	田中辰雄 10

特集

## コロナ禍と自治体

インタビュー	コロナ禍が日本の保健・医療に与える影響	二木 立 18
	新型コロナウイルス感染症と自治体病院	小熊 豊 27
	新型コロナ対策と自治体財政	今井 照 38
	新型インフルエンザ特措法と自治体	川本哲郎 51
	テレワークと自治体職場	山形巧哉 60
	新型コロナウイルスと避難所を考える	浦野 愛 67

各県自治研活動レポート	組合がコロナで苦しむ飲食店を応援 高知県本部	溝渕健躬 74
-------------	---------------------------	---------

連載	『月刊自治研』を読む〈第五季〉●郷土研究の提案	篠田 徹 76
	自治研センターの機関誌案内	83
	次号予告・編集部から	84

水害のたびに繰り返される「ダムがあれば」。「ダムがあったから」水害にならなかったとも。河川と水害を『とらえなおす』ことは二〇二〇年も必要だ。

河川工学

著者は河川工学が専門。長い間ダムによらない治水を主張してきた。ダムにだけ焦点が当たるのは本意だ。本書も山川草木悉く有仏性から始まる。「民衆の自然観」、川の「自治」、信玄堤、ハッ場ダム洪水調節計画の不透明な変更、スパー堤防、ダムの撤去工事、社会的共通資本としての川にまで至る。内容の広さばかりではない。徹底的な現場主義。川や山の奥まで分け入り、海にまでかけて水の流れ、利用、まわりの自然、生活を訪ねる。著者は脱稿直前、二〇一九年一月台風風の被災現場まででかけている。

著者の仕事場（新潟）は、信濃川がたとえ溢れたとしても床上浸水にならないよう高床式！水は逃がすのも重要、備え

も重要。

市民工学者・大熊孝

書評子は合わせて篠原修『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』（農文協）を読んだ。ここには市民工学者・大熊孝と表現されている。

その学問の集大成。しかし抽象的議論に陥らず、河川工学のわかりやすい説明、専門用語の解説までついている。それは著者が河川工学を誰に届けたいかを示している。著者はNPO法人新潟水辺の会代表も務めた。川は国交省が変えるのではなく、市民が自分とともに国交省を変えるのでなければ良くならない。

二〇一九年暮れ、予算についての記者会見で、総務大臣が「緊急 浚渫推進事業費」を新設することを発表し、「これは、私の悲願でもありました新たな政策でございます」と説明した。川は変わるのか。浚渫だけでは変わらないが、もし変化の兆しなら。 評者 菅原敏夫 本誌編集委員